

No.169

2013.
1.30

改革の博物館

編集兼発行

〒501-3941 関市小屋名
(岐阜県百年公園内)

岐阜県博物館内
岐阜県博物館協会
TEL 0575-28-3111

これからの美術館・博物館—リピータからサポーターへ

多治見市美濃焼ミュージアム 館長 金子 賢治



からも問い直されたりした。

それにつけても人的、予算的状况は悪化するばかりである。引き続き要求すべきところはしていかなないとないが、同時に従来とは異なるやり方も編みだしていかなければならないことは言うまでもない。資金調達、入館者増、美術館教育、広報活動拡大など課題は盛りだくさんである。

世界遺産制度のインパクトは非常に大きい、その無形版があることはそれほど一般的ではない。先ごろ「和食が世界遺産？」というテレビ番組があったが、今年度から来年度にかけて「和食:日本の伝統的食文化」が無形文化遺産登録に向けて審議中である。まだ審議中であるので「？」が付いているわけだが、正式に登録されれば陶芸ないし工芸一般の展覧会に大きく活用できるだろう。今を時めく料理研究家との共同展などいろいろアイデアを広げられるだろう。世界遺産制度だけではなく、日本の無形文化財制度、さらに経産省所管の伝統的工芸品制度との結節も有効だろう。

若い世代、大学ないし小中高生の入館者はあまり多くはない。特に高校生は驚くほど少ない。このところ美濃と京都の30代の陶芸家が中心となって「試みの茶事」と言う茶会を何度か開催してきた。一応の本筋は保ちつつも肩の凝らない気楽な茶会である。それと例えば高等学校総合文化祭を連動させ、高校の茶道部との「高校生大茶会」を開催する。地域ごとに茶道の状況は異なるだろうが、生

徒、先生、父兄が共に陶芸家と、そして館とつながりリピーターとなり、やがてサポーターとなる。

陶芸ないし工芸は鑑賞に際して作品に「触れる」と言うことが特に大切である。質感、重さ、厚み、冷たさ・温かさを実際に体感するのである。一般の方は勿論、地元の企業単位で関わってもらうことが可能だろう。その体験を経て展示室で作品を鑑賞する。それに茶事や茶の工芸をかませれば寺社単位でも考え得る。

企業、宗教法人様々な団体が美術館を研修の場として活用し、その場に必要の援助を行う。そうした関係が築かれていければと思う。ループル美術館のピラミッドを企業の様々な会に貸し出して年間何百万フランという収入を得たという話もう随分と前から聞く。その点で重要なのは、その援助機能をシステム化、定期化することである。

ループル美術館が「対位法」展で歴史的な所蔵品とアンゼラム・キーンファーやヤン・ファブルの現代美術作品を対話させ、ヴェルサイユ宮殿が村上隆を展示し、セーブル国立陶磁器美術館も現代作家展を開始した。美術、工芸を固定的な一つの体系ではなく、次々とそれを読み替え、更新して行くという、世界的な動向を反映したものである。

当館で開催中の中田英寿プロデュースの陶芸展もそうした試みの一つである。美術ないし工芸の専門家+陶芸家、それに様々な分野の著名なクリエーターを加える。そして誰もが知る中田英寿。新しい何かを生み出す力になると同時に、より幅広い層に注目してもらうための仕掛けである。鑑賞のみではなく創造という相に踏み込んだ美術館活動。館と一番近いところにいる作家、次に地域の人たち、有形・無形の文化財、そしてより広い地域の公衆、そこに打って出て、そこを取り込んでこそ、これからの美術館、博物館は在る。

平成24年度岐阜県博物館協会総会・県民文化講演会報告

期 日：平成24年5月22日（火）

会 場：岐阜県博物館

【総会】

平成24年度岐阜県博物館協会総会が、平成24年5月22日に岐阜県博物館ハイビジョンホールにて開催されました。



若宮多門会長の挨拶に始まり、平成24年度の功労者として次の方が表彰を受けられました。

光記念館 主任学芸員 吉井隆雄 様

岐阜県博物館 学芸員 説田健一 様

瑞浪市化石博物館 学芸員 柄澤宏明 様

古今伝授の里フィールドミュージアム所長

兼博物館・資料館統括 金子徳彦 様

議事は、平成23年度事業報告(案)及び収支決算(案)の承認、平成24年度事業計画(案)及び収支予算(案)の決定、役員の改選についてであり、原案のとおり承認されました。

平成24年度の主な事業は、専門委員会等の開催、県民文化講演会の開催、研修・研究会の開催、公開講座の開催、機関誌の発行、地域博物館活性化事業、全国大会等への参加となっています。

【県民文化講演会】

協会総会に続いて、陶磁史・茶道美術史研究者として著名な永青文庫館長竹内順一氏による「美濃焼の『謎』再検討」と題した講演会がおこなわれました。

今回取りあげられたのは志野焼の謎でした。志野焼の生産年代は天正期(秀吉・利休の時代)か、慶長期(秀吉後・織部の時代)か。この命題を、愛

知県陶磁資料館の平成21年度特別展「志野・黄瀬戸・織部のデザイン」(以下「志野展」と略する)で提起された仮説をふまえて検討されました。



「志野展」では志野焼の系譜を15世紀初期の瀬戸焼鉄釉象眼に求め、鉄釉の黒を白に反転させたのが志野焼であると、古く置く見解が示されました。しかし、消費地遺跡における発掘調査では、天正期に志野焼は見られません(これは廃棄等の年代を示すにすぎないものの)。また、志野焼の歪みが織部焼の影響であるならば、志野焼が織部焼に先行するという仮説は成り立ちません。土見せ、模様、筒型の形状なども伝統的な茶碗のあり方から逸脱しており、織部の時代の所産とすべきだとされました。

また、「志野展」では、従来向付と称した器を全て猪口としました。これは、膳の位置に由来する近代以降の呼称ではなく、形・用途による名称としたものです。向付には猪口だけでなく、壺皿、手付皿など様々な器が用いられることから、全てを猪口としたことに問題は残るものの、このような問題意識は研究の新たな可能性も感じさせます。

技術上の系譜のみを追ってはいは、ものの見方を誤るかもしれません。黄瀬戸に求めたものは何だったのか。志野焼や織部焼に求めたものは何だったのか。やきもののあり方こそ、今後は検討するべきだとの指摘がなされました。

学芸員として、このように展覧会で提示したものの見方を研究の俎上に乗せて検討していただくことは喜びであります。今後とも調査研究をしっかりと行っていきたいと思える動機付けとなりました。

第128回 岐阜県博物館協会公開講座報告 大和うるわし能講座「郡上と能」

期 日：平成23年7月17日(日) 13:00～
会 場：古今伝授の里フィールドミュージアム篠脇山荘
講 師：観世流能楽師 味方健氏
参加者：26名

郡上市大和町・明建神社の例祭「七日祭り」(岐阜県重要無形民俗文化財)に合わせて、毎年8月7日、薪能くるす桜が開催されています。能「くるす桜」は、昭和63年に改作復曲されて以来、回を重ねて今年で24回目、新作能がこのように毎年定期的に上演されることは他に例がないと聞きます。

第128回公開講座は、この「くるす桜」の改作者である観世流能楽師・味方健氏を迎えての講演です。味方氏は、『能の理念と作品』(99年、和泉書院刊)などの著作もあり、研究者と演技者とのパイプ役を自らに任じておられます。本協会設立45周年記念行事のテーマが「白山文化」であったことにも因み、白山長滝神社の延年に言及いただき、「郡上と能」と題してお話をいただきました。



奈良時代に唐から伝来した「散楽」が発音の違いから「猿楽」に転じた由来。農耕儀礼からコミカルなものやアクロバットなものへと変化していった「田楽」。加齢延年、五穀豊穡を余祝して舞った「延年の舞」。などの話から始まり、『日本庶民文化資料集成』(三一書房刊)に載った17世紀半ばと18世紀後半の資料をもとに白山長滝神社に伝わる当時の延年の姿や簡略化されていった形態に言及されました。豊富な蘊蓄を駆使しての関連するさまざまな話に、一同翌月に開催される観能を楽しみに聴講することになりました。

(古今伝授の里フィールドミュージアム 金子徳彦)

第79回 岐阜県博物館協会 会員研修会報告 「地域における社会教育と博物館」

期 日：平成24年7月5日(木)
会 場：大垣市奥の細道むすびの地記念館
講 師：松田武雄(名古屋大学大学院 教育発達科学研究科 教授)
参加者：約20名

今回の研修会では、社会教育機関としての視点から博物館が地域において果たすべき役割やその理念、実践事例などについてご講演いただきました。

松田氏はまず日本社会教育史の概略とその特徴について整理され、日本における社会教育は、欧米のそれとは違い明治期以後、文部省(現・文部科学省)の社会教育課関連の部署が中心となり、江戸期以来の伝統的な地域社会(特に小学校区単位に建設された公民館)を基盤にして展開されてきたことを指摘されました。

つぎに、地域に根差した社会教育の最新実践例として長野県松本市を挙げ、教育力をもった地域社会の構築や展開について紹介されました。行政はあくまで支援であって主体ではないという視点に立ち、地域住民と地域施設(公共機関・民間企業問わず)が連携しながら、互いに学び合いつつ、地域づくりを進めた事例であることを指摘されました。そして、こうした視点が、ソーシャルキャピタル(市民的積極参加のネットワーク)を活用してこうとする最近の博物館事情においても大きなヒントになるだろうと述べられました。

結びにおいては、地域という「場」に根差した博物館という視点から、伊藤寿朗氏が『ひらけ、博物館』(1991年刊)で平塚市博物館を紹介したことで、日本各地の博物館で広く実践されてきたことをあげ、今後はより現代的視野を前提とした6つのテーマ【ボランティアの参加、住民参加の博物館活動、学校と連携した活動、地域課題を学ぶ場、地域文化の創造活動、地域経済への貢献】を意識して、実践していくべきであろうと提言されました。

筆者においては、平成26年度に開館予定の(新)三重県立博物館が、松田氏が提言された点を実践活動に移されていると感じます。今後学ばせていただき、当記念館事業へ少しでも還元していきたいと考えています。

(奥の細道むすびの地記念館 大木祥太郎)

第78回岐阜県博物館協会研修会 文化財レスキュー

第78回研修会では、会員館による東日本大震災の文化財レスキュー活動にかかわる報告がありました。また、現地の博物館で被災された熊谷賢様より特別寄稿をいただき、本誌に掲載することとなりました。

ここに岐阜県博物館協会を代表して、亡くなられた方々に心から哀悼の意を表し、また、被災された方々にはお見舞いを申し上げるとともに一日も早い被災地復興をお祈りいたします。皆様方の一層のご理解とご支援・ご協力をお願いいたします。

陸前高田市立博物館の植物標本レスキュー

岐阜県博物館 学芸員 船戸智

東日本大震災では、東北地方をはじめ、多くの地域が甚大な被害を被りました。岩手県陸前高田市立博物館もこの被害にあい、収蔵庫にあった植物標本のほとんどは海水につかりました。

当館では、そのうち100シートの修復を引き受けることにしました。引き受けた標本の多くは、津波による海水のため、泥や砂で汚れていました。また、現地で標本を回収するまでに時間がかかったため、いくつかの標本にカビが発生していました。



修復前



修復後

修復の工程は次の通りです。①脱塩のため流水に30分程つける。②別の容器に移し、止水中で汚れ・カビを落とす。③新聞紙の上にすくい上げる。④水中で変形した葉や茎を整形する。⑤乾燥させる。手順・修復方法については前例がなく、手探り状態での作業でした。また、標本は、水につけることでもろくなったり、水からすくい上げる時に、すくい上げるための板に密着したりするなど、修復には非常に手間と時間がかかりました。

しかし、すべての標本を無事修復することができました。この作業を行うことで、東北への復興に、少しでも寄与できたと考えています。

東日本大震災

文化庁文化財レスキューに参加して

光記念館 主任学芸員 吉井隆雄

平成23年6月29日から7月1日まで文化庁文化財レスキューに参加し、石巻市にある捕鯨の歴史を伝える「牡鹿ホエールランド」と、約400年前に欧州に渡った慶長使節船の復元船を展示する「サンファン館」の2か所で活動しました。

初日は、牡鹿ホエールランドで文化財レスキューを行いました。牡鹿ホエールランドでは、ホルマリン漬けの標本、骨格標本、捕鯨用のもりや発射台などを搬出しました。板段ボールなどを資料のサイズに合わせて手際よく箱に作り上げ、梱包しました。最後に、国立科学博物館 山田先生の指導のもと、クジラの標本の搬出を行いました。クジラの標本はホルマリンが抜けた状態になっていました。ケース上部のコンパネを少しずつ破壊し、側面を徐々に叩き割りながら前面も開放し取り出すことにしました。こうしてゴンドウクジラとマッコウクジラの2体を取り出しましたが、ケースにはかなりのホルマリン臭が残っていて予想以上に作業は難航しました。これらの標本はつくば市、漁具は仙台市科学館で応急処置を施し、保管されました。



次の日は、「サンファン館」で民俗資料の洗浄作業に追われました。同じ状態での洗浄作業は簡易に思えますが結構きついものでした。また、重い資料を運び出すのはかなりの重労働でした。

今回の文化財レスキュー参加で得た事を関係者に伝えさせていただきます。1つ目は、地元で大きな地震があった場合、どこに一時保管するかなど、地域で有事の際のネットワーク作りが大切ということです。2つ目は、文化財レスキューに参加するにあたっての心構えです。新潟チームは中越地震の経験から、道具等自前で用意され、準備万端でした。

日 時 平成24年3月22日(木)
場 所 岐阜県博物館
参 加 24名

最後に改めて感じたことは、文化財は、地域の絆やアイデンティティーなど重要な意味があるため、できる限り後世に残す努力をしたいということです。

全国美術館会議の活動

岐阜県現代陶芸美術館 館長 榎本徹

全国360館あまりの国公立美術館・博物館が加盟する全国美術館会議は、文化庁の呼びかけによる「文化財レスキュー事業」に参加し、全国から多数の加盟館職員が被災地を訪れ、作品・資料の救出と修復に当たっています。

その他にも、加盟館の被災状況に関する情報の収集と公開、救援や要望の必要性の調査、派遣職員の募集・登録、支援体制の整備など、様々な震災関連活動を進めています。

また、全国美術館会議は、加盟館を通じて広く全国の方々に東日本大震災の救援や支援を呼びかけてきました。募金やご寄付、400人の作家の方々から提供いただいた作品によるチャリティオークションの収益など、これまでに寄せられた義損金は1億円以上にのびます。この義損金を活用して被災文化財の保存・修復と、被災地の美術館・博物館の復興支援に長期にわたり取り組んでいます。

なお、全国美術館会議のホームページに、東日本大震災 救援・支援活動特設サイトが開設されていますので、ぜひご覧ください。

<http://www.zenbi.jp/>



陸前高田市立博物館のレスキュー活動

特別寄稿

何故文化財を救うのか

陸前高田市海と貝のミュージアム兼

陸前高田市立博物館

主任学芸員 熊谷 賢

陸前高田市立博物館は、建物全体が津波に飲み込まれました。家2軒に車数台、いろいろな瓦礫や土砂が積み重なる中に、考古・民俗・生物・植物と多岐にわたる資料が埋もれ、また流出してしまいました。こうした資料を1点でも多く救おうと、全国の博物館、大学、研究機関、学会等の皆さんにご協力いただきました。

応援に来てくれた人の中には、「衣食住さえ困る人がいる時点での文化財レスキュー活動」に心が揺らぐ人もありました。しかし、こんな時期だからこそ、誰かがやらないと文化財は残りません。地元の宝の意味を知り、誇りを持つことが、故郷の復興の原動力になるのだと思います。何千年ものくらしの中で残されてきた足跡の上に私たちがいることを自覚することで、故郷を再生することが出来るのです。

高田松原は陸前高田のシンボルです。江戸時代に、農地を潮風から守るために篤志家が私財を投じて植えた防風林です。その遺産を市民はずっと受け継いできました。チリ地震で被害を受けたときも、婦人会らが中心になって植樹など手をかけてきました。今回、「希望の松」と呼ばれる1本を残して松原は流されてしまいましたが、松原を作った人達の願い、守り続けた人達の思いを私たちが忘れなければ、松原の物語は守られ、復興に繋がっていくと思います。

文化財は、そこに先人達がかかわってきた物語があるから意味があるのかもしれませんが、今、私たちがドロドロの瓦礫の中から引っ張り出して残そうとしているモノは、そんな記憶や物語なのかもしれません。

レスキュー作業は終わりの見えない長期戦です。今後とも皆さんのご支援をいただければと思います。



陸前高田市立博物館1階展示室の状況(4月21日)

館・園紹介 No.148

奥の細道むすびの地記念館

〒503-0923 岐阜県大垣市船町2丁目26番地1

TEL : 0584-84-8430

<http://www.city.ogaki.lg.jp/0000012751>

松尾芭蕉の紀行文学『奥の細道』がむすばれた地 大垣に「憩いと賑わい」を創出する空間「奥の細道むすびの地記念館」が開館しました。当記念館は、近世紀行文学の傑作『奥の細道』を深く読み味わえる「芭蕉館」・大垣の先人を紹介する「先賢館」・西美濃観光の拠点施設「観光・交流館」と、大垣藩家老 小原鉄心の別荘「無何有荘・大醒榭」から構成されています。

◆芭蕉館(常設展示、200インチ・3Dシアター)

臨場感あふれる3D映像とともに『奥の細道』を体感



◆先賢館

江戸後期から幕末にかけて活躍した5人の先賢の偉業を紹介



芭蕉と心を重ね合わせる空間
～奥の細道むすびの地記念館～



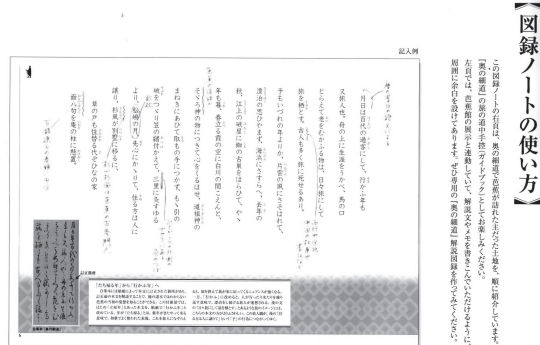
◆芭蕉館(常設展示)

推敲の人・芭蕉の発想や作意を知る関連資料を展示しながら、『奥の細道』の本文を読むという展示手法



◆図録ノートを楽しむ

芭蕉館展示と連動し、解説文を書き込むことで、オリジナルの『奥の細道』解説図録を作成できる



【交通】JR大垣駅(4番のりば)からバス7分

「奥の細道むすびの地記念館前」下車すぐ

【開館時間】午前9時～午後5時

【休館日】無休(12/29～1/3を除く)

【入館料】一般300円